

巻頭写真 福島県猪苗代湖南部の鬼沼における完新世後期の埋没林

A late Holocene buried forest at Oninuma, Fukushima Prefecture, northeastern Honshu

福島県郡山市鬼沼は猪苗代湖南岸に面する小規模の扇状地であり、その後背湿地は、古くから水田として利用されてきた(写真1)。しかし、ぬかるみやすい土地としばしば掘り上がる埋もれ木(写真2)によって、耕作は困難を極めていた。

2006年末から地元住民と郡山市が中心となり鬼沼地区の圃場整備工事が実施され、重機により扇状地を南北に縦断する約300mの人工水路などが掘削された(写真3)。この掘削で、多数の木材化石が掘り上げられるとともに、人工水路の法面には植物遺体を多く含む層厚約1mの泥炭層が露出した(写真4~6)。木材化石群のうち、大型のものは直径20



写真1 鬼沼の扇状地(圃場整備前)。



写真4 水路法面に露出したトネリコ属根株。



写真2 耕作で掘り上げられたサワラ材。



写真5 掘り上げられたトネリコ属材。



写真3 約300mの中央水路。



写真6 扇状地縁辺から産したサワラ樹幹材。



写真7 水平方向に広く張るサワラの根系。

～80 cm を超える樹幹や根株などであり、保存状態は極めて良好であった。

筆者らは郡山市農地林務課の協力を得て、この地域の埋没林の復元を目的として、人工水路を中心に地質調査を行い、さらに産出した木材化石の同定、堆積物の花粉分析および ^{14}C 年代測定を行った。調査の結果、この扇状地にはハンノキ属ハンノキ節やトネリコ属などの湿地林要素とともに、サワラとアスナロが広く混交する森林が成立していたことがわかった(箱崎ほか, 2009)。このような植生は、この地域を含め現在の日本の湿地には認められない。また、サワラの木材化石の根系は、水平方向に広く張る特徴があり(写真7)、福井県三方低地帯の泥炭層から産したスギの木材化石の根系(高原ほか, 1988)と共通点がみられる。同種の年輪数は最大で180年近くなることから、サワラは長期に渡って湿地林の構成種として生育していたと考えられる。ハンノキ属ハンノキ節や、トネリコ属、クリなどの木材化石の年輪数は200年以上に達しており(写真8)、現生木では稀に見る老齢木が湿地とその周辺に生育していたようである。鬼沼地区に近接する横沢地区では、本調査地と同様に、小元(1986)によって約2000年前のサワラの木材化石が報告されている。したがって、この地域の完新世後期の低湿地の植生にとって、サワラとアスナロは、西日本の低湿地埋没林で報告されるスギと同様に、湿地林の重要な構成種であったといえる。

このように、鬼沼の埋没林は、人間活動によって失われた低地の植生や、その古生態を保存しており、今後の植生史研究にとって重要な埋没林になると考えられる。

引用文献

箱崎真隆・吉田明弘・木村勝彦, 2009. 福島県鬼沼における木材化石と花粉化石からみた完新世後期の時空間的な植生分布とサワラ・アスナロ湿地林. 植生史研究 17: 3-12.

小元久仁夫, 1986. 猪苗代盆地南部より産出した埋没林の放射性炭素年代と古環境. 東北地理 38: 154-157.

高原 光・伊藤孝美・竹岡政治, 1988. 約3,000年前のスギカミキリ被害材と当時の森林環境. 日本林学会誌 70: 143-150.

(箱崎真隆・吉田明弘・木村勝彦 Masataka Hakozaki, Akihiro Yoshida and Katsuhiko Kimura)



写真8 樹齢200年以上のトネリコ属(左)とクリ(右)の木材化石。